

不活化ポリオワクチンの接種について

平成 23 年 10 月より、サノフィ・パスツール社製の不活化ポリオワクチンの接種を開始します。接種の対象は、主に海外渡航のために不活化ポリオワクチンの接種を要する小児及び成人となりますが、渡航者以外の希望者も受け付けております。

予約は、乳児～就学前児童は、月曜日午前「不活化ポリオワクチン外来枠」、それ以外の小児及び成人は通常のワクチン外来枠で接種を行います。

不活化ポリオワクチンは、現時点では国内で認可されておられません。このワクチンは、当院が個人輸入し、ご希望する方に接種するものです。不活化ポリオワクチンは、既に多くの国々において使用されておりますが、重篤な副反応の報告はほとんどありません。しかし、万が一不活化ポリオワクチンにより重篤な副反応が出現しましても、国内法に基づく補償は行われません。このため、接種に際しましては、御本人あるいは保護者の方に、不活化ポリオワクチンの効果及び副作用についてご理解いただいた上で、事前に接種要請書への御署名をいただいております。

なお、ジフテリア・百日咳・破傷風 3 種混合ワクチン、ヘモフィルスインフルエンザ b 型菌 (Hib) ワクチンが開始されていない乳児の方には、5 種混合ワクチン (ジフテリア・百日咳・破傷風 3 種混合ワクチン、ヘモフィルスインフルエンザ b 型菌、不活化ポリオの混合ワクチン) をお勧めしております。5 種混合ワクチンも輸入ワクチンであり、接種前に接種要請書へ御署名いただいております。

不活化ポリオワクチンは、入荷の状況が不安定となる場合があります。不活化ポリオワクチンを十分に確保できないと判断される場合は、予約の制限または一時中断となる場合があります。また、接種希望者が急増した場合にも、予約の制限、接種の一時中断を行う場合がございますので、あらかじめご了承ください。

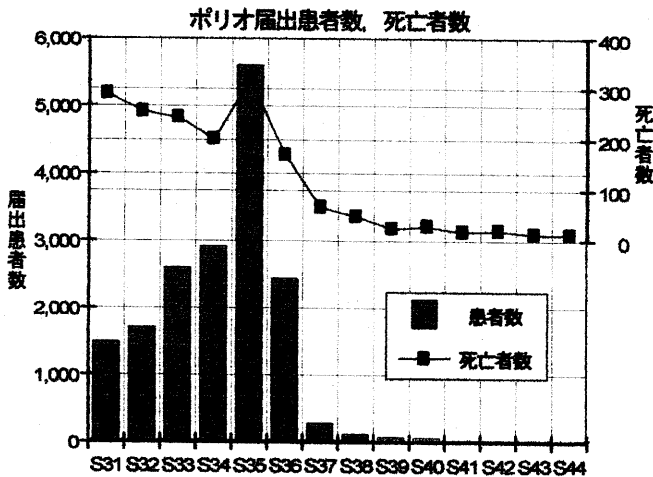
不活化ポリオワクチンの接種方法は、小児は、生後 2 か月から 1-2 か月間隔で 3 回接種 (大腿部へ筋肉注射) 行い、3 回目終了後 1 年後に 4 回目を接種します。成人は、1-2 カ月間隔で 2 回接種した後に、8-12 カ月後に 3 回目の接種を行います。既に不活化ポリオワクチン、経口生ポリオワクチンの接種を完了されている方も、最終のワクチン接種より 5-10 年経過した場合に追加接種を行うことがあります。

現在、国産 4 種混合ワクチン (ジフテリア、百日咳、破傷風、不活化ポリオ) 及び国産不活化ポリオワクチンの開発が進められておりますが、これらのワクチンが市販されましたら、現在使用しております海外産不活化ポリオワクチン接種は終了する予定です。

不活化ポリオワクチンに関する説明書

ポリオウイルスによる病気と流行状況

現在、日本ではポリオウイルス(1型), 2型, 3型; 野生株)によるポリオ(急性灰白髄炎)は発生していません。1981年以降日本で報告されたポリオ症例はすべてポリオワクチン株ウイルスによって引き起こされたものです。



1960年(昭和35年)北海道を中心にポリオが大流行。

1961年(昭和36年)経口生ポリオワクチンをソビエト連邦とカナダから緊急輸入して、7月から小児に接種。

1962年(昭和37年)ポリオ患者数激減。

1964年(昭和39年)より経口生ポリオワクチンを定期予防接種ワクチンとして接種。

1981年(昭和56年)以降のポリオ症例はすべてワクチン関連麻痺症例。

(感染症予防必携の付表より作図)

WHOが進めているポリオ根絶計画によって、ポリオ野生株ウイルスによるポリオの発生がみられる国々は、その数が減少しており、インド北部とアフリカのナイジェリアが主な流行地域です。しかし、人々が短時間で遠隔地に移動できるようになったため、これらの流行地域から他の国々に野生株ウイルスが運ばれて、運ばれた先でポリオ患者が発生することがあります。また、ポリオワクチン接種率が低くなった地域ではポリオワクチン株ウイルスが免疫のない人々に感染し、次第に病原性が強くなって、麻痺患者が発生することもあります。このため、ポリオが根絶された国々でもポリオの再流行を防ぐため、国民へのワクチン接種を継続しています。

ポリオワクチンの種類

現在、世界で使用されているポリオワクチンは、経口生ポリオワクチンと不活化ポリオワクチンの2種類があります。日本では、経口生ポリオワクチンが定期接種として、生後3カ月から90カ月の間に2回(標準的には生後3~18カ月の間に)経口接種されています。経口生ポリオワクチンはきわめて有効なワクチンですが、400万~500万回の投与に1例の割合で、ワクチン関連の麻痺例が報告されています。

日本ではまだ認可されていませんが、ポリオが根絶された国々の多くでは、経口生ポリオワクチン接種後の麻痺発生を防ぐため、不活化ポリオワクチンが接種されています。

国によっては、ワクチン関連の麻痺を防ぎつつ強い免疫を付与するために、初め不活化ポリオワクチンを1~3回注射し、次いで経口生ポリオワクチンを1~6回飲ませています。たとえば、米国では、1996年に、経口生ポリオワクチン接種から、不活化ポリオワクチンを2回注射したのち経口生ポリオワクチンを2回飲むという接種方式を導入し、2000年に不活化ポリオワクチン4回接種に変更するまで実施していました。

不活化ポリオワクチンの接種法

今回用いる不活化ポリオワクチンはサノフィ・パスツール社製のワクチン（商品名：イノヴァックス・ポリオ、INOVAX POLIO）です。

本ワクチンは、生後2ヵ月から接種を受けられます。1回0.5mlのワクチンを1～2ヵ月間隔で3回接種します。経口生ポリオワクチンと違って、接種は大腿部への筋肉注射で行います。3回目接種が終了して1年後に4回目の接種を行います。その後は、5年ごとの追加接種が勧められています。それは、不活化ポリオワクチンによる免疫は、経口生ポリオワクチンによる免疫ほど強くないためです。

不活化ポリオワクチンは成人にも接種できます。成人の場合は、1～2ヵ月間隔で2回接種し、2回目接種終了8～12ヵ月後に3回目を接種します。その後は、10年ごとの追加接種が勧められています。小児期に経口生ポリオワクチン接種を2回済ませている成人では、1回追加接種します。

不活化ポリオワクチンの有害事象（副反応）

不活化ポリオワクチンは、接種されたワクチン中のウイルスが体内で増えることはないため、接種後に麻痺が起こる危険はありません。しかし、有害事象（副反応）がないとは言えません。最も多い有害事象は、注射した部位の、発赤、腫脹、疼痛などです。頻度は下がりますが、接種後発熱することもあります。きわめてまれに（0.01%未満）けいれんが起きたり、全身に発疹が出ることも報告されています。

不活化ポリオワクチンの接種代金

予防接種は健康保険診療の対象ではありませんので、予防接種を受ける場合には、当院での診療に係わる初診料または再診料は自費負担となります。また、本ワクチンは当院の薬剤費で海外から個人購入したものですので、本ワクチンの接種を受けた方には、ワクチン購入費および通関料を含めた輸送費などを元に算定したワクチン代金を負担していただきます。